帝国が，ムスリム期のスペイン同様，コスモポリタン・アイデンティティに満ちた場であったと論じている（Zubadia 1999）。そこではイスラム文化とペルシア文化，さらにギリシャ哲学とユダヤの哲学の融合がみられたとしている。

ズバディアの意図は，そうした事例の特殊性に焦点をあてることにあった。とはいえ，ズバディアがおこなったことには，「豊かなコスモポリタンの歴史的遺産」を描いたという以上のものがある。というのも，オスマン帝国は１つの文化として存在したのではなく，むしろ相互に交流のあった多くの文化から構成されていたからである。ズバディアがやり遂げたこととは，どのようにコスモポリタン的現象を分析すべきかについて実例を示したことだといえる。

社会学の領域においても，コスモポリタニズムにもとづく世界理解を示す理論が提示されている。たとえばウォーラステインは，国民国家を研究するにあたって，地球規模で発達する経済利益にもとづく関係を分析単位とした世界システム論を提唱した。世界システム論では，国家間において，ある特定の構造化された経済的関係が存在しているとする。国々は，特定の資本組織と労働関係を構築するために，周辺，準周辺，そしてコアというように分かれていく。こうした構造の中で，周辺から準周辺そしてコアへと移動していく国もあれば，同じカテゴリーにとどまる国もある。いずれにしても，構造自体は常に変わることがない（Wallerstein 1974）。たとえば，国民国家体制が成立して以降では，コアから移動した唯一の国としてアルゼンチンがあるが（Harvey 2006），それも国際的な経済関係をそのままにしてのことであった。

こうした考えと平行して，ルーマンは国境を越えてグローバルなコミュニケーションがみられるようになることを「世界の政治組織（world polity）」という言葉を用いて概念化している[1)]。メイヤーらはこの概念を引き継ぎ，「世界政治体（world polity）」という概念で定式化をはかる（Meyer 1987）。すなわちグローバルなレベルにおける規範的同型化プロセス（normative isomorphic processes）が，国際的な現象を理解するうえで重要な役割を果たすと論じられる。他の組織と同様に，相互交流を増やしていく国家は，相互に類似していく傾向があるとする。国家同士が似通ったものになれば，国家が取る行動もまたコーディネートされたものになる。このコーディネートされた行動こそが，世界政治体と呼ばれるものである。この視点は，文化さえも国民国家間の相互作用から生まれると主張する点で，ズバディアの理解と重なる。

コスモポリタニズムはグローバリゼーションではない。むしろ，グローバルな状態に世界が進行する過程で立ち現れる一形態と捉えることができる。20 世紀後半から今日に至るまで，間違いなく世界のグローバル化は進んでいる。新自由主義経済政策に代表される経済グローバル化に限らず，政治や文化の領域でも融合と再編が進んでいる。グローバル・プロセスは，国境という境界の意味内容を変化させてきた。境界は曖昧で，経済，政治，文化といったそれぞれの分野で異なっており，かつ不確定である（Grande 2006）。

他方，グローバリゼーションが進んだとはいえ，現代世界を組織化するユニットとして，国民国家の存在を否定する訳にはいかない。大前研一をはじめとする研究者が主張するように，国民国家の境界の影響はいまだに大きい（Ohmae 1996）。国家の存在と国家をまたぐ諸現象の出現，まさにこの２つの現象の共存に対してコスモポリタニズムは議論を向ける。メイヤーやウォーラステインなどによる今日の世界社会の捉え方が登場するのは，まさにこの文脈によるものといえよう。

## 3. 研 究 方 法

### 3-1　方法論的ナショナリズムと方法論的コスモポリタニズム

方法論的ナショナリズムは，社会学においても，最も初期の社会学者であるデュルケーム（Durkheim 1895–1978）から，最近ではレンスキー（Lenski 1966）やティリー（Tilly 1975, 1984）を通じて，その方法論の中へと埋め込まれている。彼らは，国民国家が政治的に大きな影響力を持っているという前提に立っている。そのため，ある国家内の組織集団や個々人の違いよりも，国家間の違いのほうが大きいと考えている。方法論的ナショナリズムは，今日でもいたるところで利用されている。ある学問的な問いに無難に答えようとするなら，方法論的ナショナリズムに依拠しておけばよいといえるかもしれない。

今日我々が住むグローバルな時代においても，方法論的ナショナリズムは，世界的な出来事に関して重要な視点を提供する。とはいえ，この視点がかえって他の部分を曖昧にしてしまうということにも，気をつけておかなければならない。純粋な国際比較研究の場合，国家間の差異とその原因を解明することが主要な課題となる。その方法は，国家間での異同を明確にするという点で有益ではあるが，他方，国家を跨いで，もしくは複数の国家に覆いかぶさるようにして生起する現象を捉えきることができない。

コスモポリタニズムに関する文献においては，グローバルな現象をどのように捉えるかという議論が活発になされている（Beck 2000; Calhoun 2002; Kaldor 2002; Levy and Sznaider 2003; Delanty 2006; Turner 2006）。ベックとズナイダーは，社会科学者がグローバリゼーションを研究するに際して，研究方法をコスモポリタニズムに適合的なものにする必要があると主張した（Beck and Sznaider 2006）。バートベックは，グローバリゼーションとコスモポリタニズムの両方を研究するために，文化的な視点が必要であると論じている（Vertovec 2002）。この様にアプローチの方法はさまざまであり，時には互いに相容れないものである。しかし，コスモポリタニズムがどのように定義されたとしても，今日の世界を検討する際には有効的な視点であることに変わりはない。

とはいえ，コスモポリタニズム研究が巷にあふれているわけではないことにも気をつけておかなければならない。確かに，コスモポリタニズムの理論的側面に関する研究はいくらかある。しかし，方法論的な側面からの研究は非常に少ない。こうした傾向はベック自身の研究にみてとれるし（Beck 2000），この研究領域の多くの研究者にもあてはまる。

方法論的コスモポリタニズムでは，グローバルな現象にとって理論的に重要な変数の検証を通じて，グローバルな現象を捉えることを重視する。グランデによれば，方法論的コスモポリタニズムは，国民国家の国境がもつ曖昧さと不確定性を強調することにある（Grande 2006）。彼は，国民国家の国境よりも地域文化を重視することこそが，コスモポリタン政治学につながるとする。レヴィ＆シュナイダーは，グランデとは対照的な観点からコスモポリタン政治学にアプローチする。彼らは，国際政府間組織（IGOs）におけるコスモポリタン政治は，コスモポリタンな志向性をまだもたない諸国に挑戦課題を提示していると捉える（Levy and Sznaider 2006）。彼らはまた，伝統的な分析単位である近代国家がおこなう「パワーポリティクス」内においてすら「権力」が次第に解体されていく一例として人権レジームを引き合いに出し，コスモポリタン・アイデンティティが存在すると論じている（Levy and Sznaider 2003）。

これらの研究事例は，現代の国民国家体制が，国家という器のみではもはや収まらなくなってきていることを指摘している。そして，ここにこそ